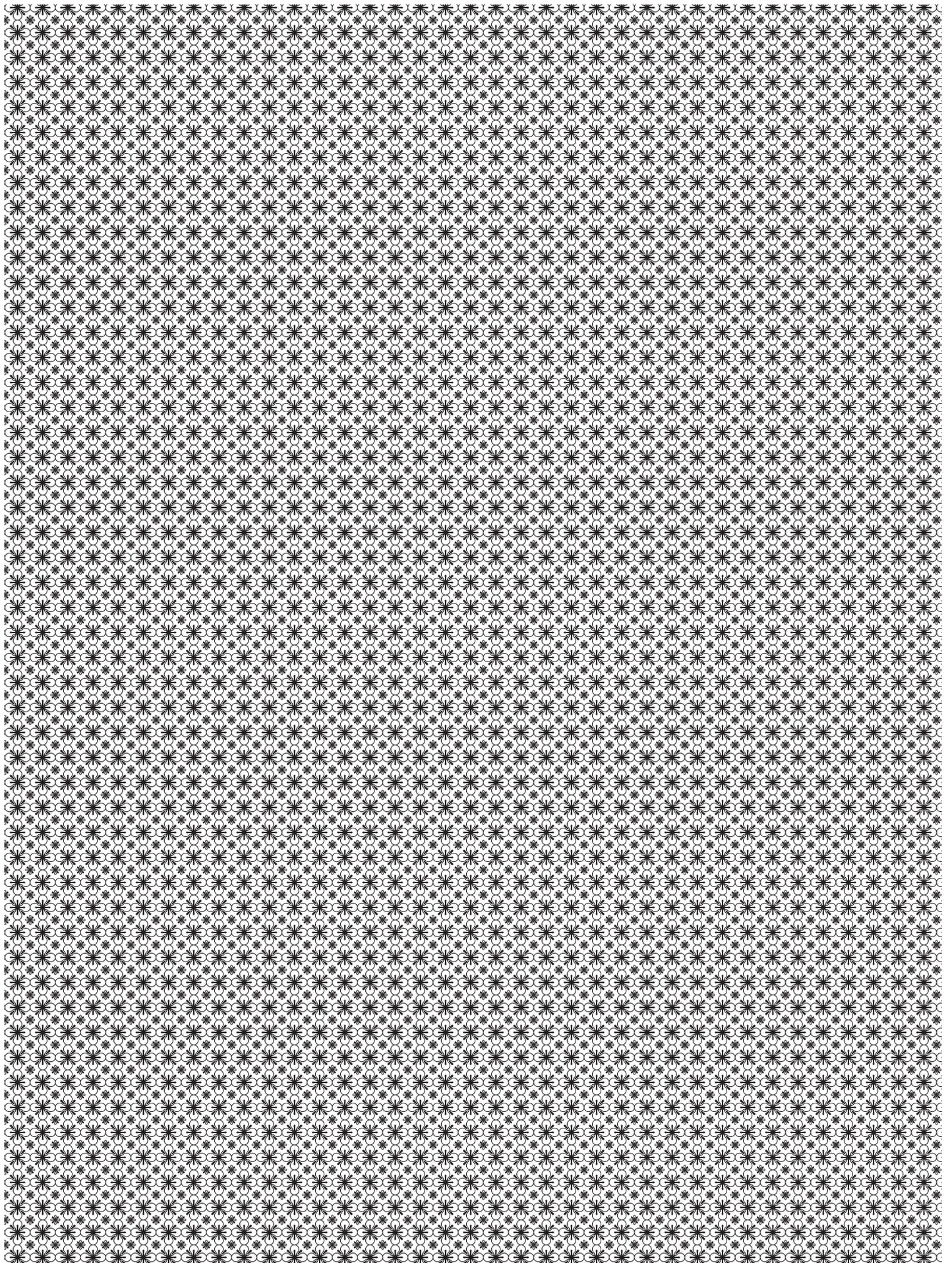


国語



〔問 1〕 例文の傍線部の意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【例文】 まさに木で鼻をくくるような返事だった。

- 1 不愛想にふるまうこと。
- 2 諦めをつけること。
- 3 大切に扱うこと。
- 4 困り果てること。
- 5 悲しみにくれること。

〔問 2〕 次の四字熟語の意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【虎視眈々】

- 1 おつとりと構えている様子。
- 2 じつと機会をねらっている様子。
- 3 気を抜いて油断している様子。
- 4 大物がゆつたりと歩いている様子。
- 5 見るからに生き生きとしている様子。

〔問 3〕 例文の傍線部の意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【例文】 ひどい雨であまつさえ雷も鳴り出した。

- 1 きつぱりと
- 2 さつそく
- 3 おまけに
- 4 ひたすら
- 5 ほんの少し

〔問 4〕 例文の傍線部の意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【例文】 東京タワーのフォルムそのものが、たとえようもないのである。

- 1 色
- 2 大きさ
- 3 形態
- 4 材質
- 5 歴史

〔問 5〕 例文の傍線部と同じ漢字を用いるものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【例文】 ケンメイに作品を書き続けた。

- 1 鉄棒でケンスイをする。
- 2 地震ホケンに加入する。
- 3 有能な社員をハケンする。
- 4 ケンシンのな看病の結果だ。
- 5 昼夜ケンコウで働く。

〔問題〕次の文章を読み、後の〔問 6〕～〔問 10〕に答えなさい。

海の岸辺に緑なす檜の木、その檜の木に黄金の細き鎖のむすばれて

—^{※1}プウシキン—

私は子供のときには、余り質のいい方ではなかった。女中をいじめた。私は、のろくさいことは嫌いで、それゆえ、のろくさい女中を殊にもいじめた。お慶は、のろくさい女中である。林檎の皮をむかせても、むきながら何を考えているのか、二度も三度も手を休めて、おい、とその度毎にきびしく声を掛けてやらないと、片手に林檎、片手にナイフを持ったまま、いつまでも、ほんやりしているのだ。足りないのではないかと、思われた。台所で、何もせずに、ただのつそりつ立っている姿を、私はよく見かけたものであるが、子供心にも、うすみつともなく、妙に瘡にさわって、おい、お慶、日は短いのだぞ、などと大人びた、いまま思っても背筋の寒くなるような非道の言葉を投げつけて、それで足りずに一度はお慶をよびつけ、私の絵本の^{※2}観兵式の何百人となくうようよしている兵隊、馬に乗っている者もあり、旗持っている者もあり、銃担っている者もあり、そのひとりひとりの兵隊の形を鉄でもって切り抜かせ、無器用なお慶は、朝から昼飯も食わず日暮頃までかかって、やっと三十人くらい、それも大将の鬚を片方切り落したり、銃持つ兵隊の手を、熊の手みたいに恐ろしく大きく切り抜いたり、そうしていちいち私に怒鳴られ、夏のころであった、お慶は汗かきなので、切り抜かれた兵隊たちはみんな、お慶の手の汗で、びしょびしょ濡れて、私は遂に癩癩をおこし、お慶を蹴った。たしかに肩を蹴った筈なのに、お慶は右の頬をおさえ、がばと泣き伏し、泣き泣きいった。「親にさえ顔を踏まれたことはない。一生おぼえております。」うめくような口調で、とぎれ、とぎれそういつたので、私は、流石にいやな気がした。そのほかにも、私はほとんどそれが天命でもあるかのように、お慶をいびつた。いまでも、多少はそうであるが、私には無智な魯鈍の者は、とても堪忍できぬのだ。

一昨年、私は家を追われ、一夜のうちに窮迫し、巷をさまよい、諸所に泣きつき、その日その日のうち繋ぎ、やや文筆でもって、自活できるあてがつきはじめたと思つたとたん、病を得た。ひとびとの情で一夏、^{※3}千葉船橋町、泥の海のすぐ近くに小さい家を借り、自炊の保養をすることができ、毎夜毎夜、寝巻をしぼる程の寝汗とたたかい、それでも仕事はしなければならず、毎朝毎朝のつめたい^{※4}一合の牛乳だけが、ただそれだけが、奇妙に生きているよろこびとして感じられ、庭の隅の^{※5}夾竹桃の花が咲いたのを、めらめら火が燃えているようにしか感じられなかったほど、私の頭もほとほと痛み疲れていた。

そのころのこと、戸籍調べの四十に近い、痩せて小柄のお巡りが玄関で、帳簿の私の名前と、それから無精髯のばし放題の私の顔を、つくづく見比べ、おや、あなたは……のお坊ちゃんじゃございませんか？ そう言うお巡りのことには、強い故郷の訛があつたので、

「そうです。」私はふてぶてしく答えた。「あなたは？」

お巡りは痩せた顔になるしいばかりにいつぱいの笑をたたえて、

「やあ。やはりそうでしたか。お忘れかも知れないけれど、かれこれ二十年ちかくまえ、私はKで馬車やをしていました。」

Kとは、私の生まれた村の名前である。

「ごらんの通り、」私は、にこりともせずに応じた。「私も、いまは落ちぶれました。」

「とんでもない。」お巡りは、なおも楽しげに笑いながら、「小説をお書きなさるんだったら、それはなかなか出世です。」

私は苦笑した。

「ところで、」とお巡りは少し声をひくめ、「お慶がいつもあなたのお噂うわさをしています。」

「おけい？」すぐには呑みこめなかった。

「お慶ですよ。お忘れでしょう。お宅の女中をしていた——」

思い出した。ああ、と思わずうめいて、私は玄関の^{※6}式台にしゃがんだまま、頭をたれて、その二十年まえ、のろくさかったひとりの女中に對しての私の悪行が、ひとつひとつ、はつきり思い出され、ほとんど座に耐えかねた。

「幸福ですか？」ふと顔をあげてそんな突拍子とつひよしない質問を發する私のかおは、たしかに罪人、被告、卑屈な笑いをさえ浮かべていたと記憶する。「ええ、もう、どうやら。」くつたなく、そうほがらかに答えて、お巡りはハンケチで額ひたいの汗をぬぐって、「かまいませんでしょうか。こんどあれを連れて、いちどゆっくりお礼にあがりましょう。」

私は飛び上がるほど、ぎよつとした。いいえ、もう、それには、とはげしく拒否して、私は言い知れぬ屈辱感もたに身悶もたえしていた。けれど、お巡りは、朗ほがらかだった。

「子供がねえ、あなた、ここの駅につとめるようになりましてな、それが長男です。それから男、女、女、その末のが八つでことし小学校にあげりました。もう一安心。お慶も苦労いたしました。なんというか、まあ、お宅のような大家にあがって行儀見習みまいした者は、やはりどこか、ちがいますてな。」すこし顔を赤くして笑い、「おかげさまでした。お慶も、あなたのお噂、しじゅうして居ります。こんどの公休には、きつと一緒にお礼にあがります。」急に真面目な顔になって、「それじゃ、きょうは失礼いたします。お大事に。」

それから、三日たつて、私が仕事のことよりも、金銭のことで思い悩み、うちにじつとして居れなくて、竹のステッキ持って、海へ出ようと、玄関の戸をがらあけたら、外に三人、浴衣ゆかた着た父と母と、赤い洋服着た女の子と、絵のように美しく並んで立っていた。お慶の家族である。私は自分でも意外なほどの、おそろしく大きな怒声を發した。

「来たのですか。きょう、私これから用事があつて出かけなければなりません。お氣の毒ですが、またの日においで下さい。」

お慶は、品のいい中年の奥さんになっていた。八つの子は、女中のころのお慶によく似た顔をしていて、うすのろらしい濁った眼でぼんやり私を見上げていた。私はかなしく、お慶がまだひとことも言い出さぬうち、逃げるように、海浜へ飛び出した。竹のステッキで、海浜の雑草を薙ひぎ払い薙ひぎ払い、いちどもあとを振りかえらず、一步、一步、地団駄じだんた踏むような荒すんだ歩きかたで、とにかく海岸伝いに町の方へ、まっすぐに歩いた。私は町で何をしていたろう。ただ意味もなく、^{※7}活動小屋の絵看板見あげたり、呉服屋の^{※8}飾窓を見つめたり、ちえつちえつと舌打ちしては、心のどこかの隅で、負けた、負けた、と囁ささやく声が聞きえて、これはならぬと烈はげしくからだをゆすぶっては、また歩き、三十分ほどそうしていたらうか、私はふたたび私の家へとつ返した。

うみぎしに出て、私は立止まった。見よ、前方に平和の図がある。お慶親子三人、のどかに海に石の投げっこしては笑い興じている。声がここまで聞こえて来る。

「なかなか、」お巡りは、うんと力こめて石をほうつて、「頭のよさそうな方じゃないか。あのひとは、いまに偉くなるぞ。」

「そうですとも、そうですとも。」お慶の誇らしげな高い声である。「あのかたは、お小さいときからひとり変つて居られた。目下のものにもそれは親切に、目をかけて下さった。」

私は立ったまま泣いていた。けわしい興奮が、涙で、まるで気持ちよく溶け去ってしまったのだ。負けた。これは、いいことだ。そうなければ、いけないのだ。かれらの勝利は、また私のあすの出發にも、光を与える。

(太宰 治『黄金風景』より)

- ※1 プウシキン：ロシアの詩人、小説家。(一七九九—一八三七)
- ※2 観兵式：旧日本陸軍で、軍隊を整列させて天皇が観閲する儀式。
- ※3 千葉県船橋町：現在の千葉県船橋市の南部にあたる。
- ※4 一合：「合」は容量の単位。一合は約〇・一八リットル。
- ※5 夾竹桃：キョウチクトウ科の常緑低木。夏、紅色や白色の花を開く。
- ※6 式台：玄関先に設けた板敷きの部分。
- ※7 活動小屋：映画館の旧称。
- ※8 飾窓：商店で、商品を陳列してある窓ショーウィンドー。

〔問 6〕傍線部I「ひとりひとりの兵隊の形を鉄でもって切り抜かせ」とあるが、「私」がお慶に兵隊の切り抜きをさせたのはなぜか。理由として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 お慶が本当にのろくさいかどうか、別の仕事を与えて試したかったから。
- 2 何時間もぼんやり台所につっ立っているお慶の姿を見たくなかったから。
- 3 お慶を困らせたいたい気持ちがある一方で、彼女に甘えたい気持ちもあったから。
- 4 故意にお慶の得意でないことをさせることで、いじめるきっかけを作るため。
- 5 女中としてほとんど何も働くことができないお慶に得意な仕事をさせるため。

〔問 7〕傍線部Ⅱ「私はふてぶてしく答えた」とあるが、このときの「私」の気持ちの説明として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 頭が痛みきって疲れているときに、めんどろな話は聞きたくない。
- 2 自分の子供時代を知っている人に、今の落ちぶれた姿を見られたくない。
- 3 文筆でもって、自活できるあてがつきはじめたので得意げになった。
- 4 昔、のろくさい女中をいじめていたことを思い出して、不快になった。
- 5 見知らぬ人から自分の子供の頃のことを突然尋ねられたため、警戒した。

〔問 8〕傍線部Ⅲ「私は苦笑した」とあるが、このときの「私」は何に対して苦笑したのか。説明として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 みすぼらしい私に中身の無い激励の言葉をくれるお巡りのうさん臭さに対して。
- 2 大家の息子である私にこびへつらおうとするお巡りのいやらしさに対して。
- 3 私のみじめな気持ちをおもんぱかろうともしないお巡りの鈍感さに対して。
- 4 病に苦しむ私を少しでも元気づけようとするお巡りのけなげさに対して。
- 5 小説を書いていれば出世だと考えてしまうお巡りの無邪気な無知さに対して。

〔問 9〕傍線部Ⅳ「はげしく拒否」する「私」の気持ちの説明として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 現在の自分のみじめな境遇と比べ幸福らしい他人を見ることで嫉妬したくない。
- 2 お慶をみると質のわるい自分に戻ってしまいそうなので、二度と会いたくない。
- 3 お慶を思い出すことによる罪悪感が苦痛なので、顔を合わすことができない。
- 4 お慶から改めてお礼を言ってもらえるようなことは、何ひとつしていない。
- 5 故郷を追われてしまった身としては、子供のときのことは思い出したくない。

〔問 10〕傍線部Ⅴ「負けた。これは、いいことだ」とあるが、「私」は「かれら」のどのような姿を見て、負けを受け入れることができたのか。説明として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 かれらの、人に対して何の疑いもなく何の下心もなく信じる姿。
- 2 かれらの、下積み時代を経た末に現在の幸福をつかんでいる姿。
- 3 かれらの、人を外見で判断するのではなく、内面を見通す姿。
- 4 かれらの、いまは落ちぶれた私を傷つけないようにと配慮する姿。
- 5 かれらの、かつて非道なことをした自分を許してくれている姿。

〔問題〕次の文章を読み、後の〔問 11〕～〔問 15〕に答えなさい。

アフリカ研究者として、またとくに^{※1}ブルキナファソに長くいた者として、よく、「アフリカには、いったいいくつ言語があるのですか」とか、「ブルキナファソという一つの小さな国だけで、いくつの言語が話されているのですか」とたずねられることがある。長くつきあってきたフランス人式がついつつてしまった私としては、こういうとき、黙って肩をすくめ、両手をひろげてみせたくなる。そして、私自身への問いかけとして、あらためて思う——言語は、いったい数えられるものなのだろうか、と。

大学で^{※2}文化人類学の学生だった頃から、よく^{※3}言語地図というものを見せられ、教材として学習させられた。東南アジアには、アフリカには、どういう語族の、どういう言語が、どのように分布しているか。試験のために丸ごとおぼえたこともあった。地図の上に、さまざまな言語の分布範囲が、色分けして示されている。中には一部、他の色の言語が、細い斜線のように入っているとあるところもある。つまりここでは、斜線の言語も少数派として話されているということなのであろう。してみると、言語は、いくつと数えられるだけでなく、分布を地図で示すことができるものなのか。

私は先人のやったことの、^{※4}あげ足とりをしているのではない。たしかに言語分布地図は、初歩のある段階での勉強には、おおまかな理解のために、あるいはむしろ、「言語」というものについての^{※5}通念を、現地体験で打ちくだく前提として知っておくために、有用だと思う。私が、実際にアフリカに行つて、ある土地でしばらく暮し、言語地図の上でさまざまに塗り分けられた地方を歩いてみれば、そういう紙の上の知識としてある現実と、現実の現実とがいかにかへだたつたものであるかがよくわかる。

言語というものについて、根源のところから考えるのに、アフリカは貴重な場を提供してくれる。私が行きはじめた頃、つまり一九六〇年代のはじめで、英、仏の旧植民地から政治的独立を達成したばかりの時代には、私が最も長く暮したブルキナファソ（当時のオートボルタ）では、政府発表の公式数字でも、学齢期の児童の就学率は九パーセントだった。学校では小学校から、旧植民地^{※6}宗主国がのこした^{※7}公用語のフランス語だけを教え、フランス語だけを使って他の教科の教育をするのだが、もともと彼らは文字というものを使わなかったから、当時電気も水道もない大部分の土地で、住民は大人も子どもも、あらゆる種類の文字と一切関係のない生活をしていた。就学率やフランス語の^{※8}識字率は、その後いくらか上つたようだが、いまでも首都のワガドゥグーや、西の商業都市ボボ・ディウラソなどの大都会を少し離れば、人々は文字とは無縁に暮している。いや首都の中でも、野菜や香辛料の店を出しているおばさんたちは、買い物ともども、文字など必要としない言語活動の次元で活発に商取引をやっている。

雨が一滴も降らない長い乾季の^{※9}農閑期の夜、あちこちの家の中庭の、満天の星の下で、夜ふけまでつづく夜の^{※10}まどい「^{※11}ソアサガ」で語られるお話の数々を聞いて、私はこの人たちの声としての言語の輝きにうたれた。それらのお話を録音したものを、いろいろな機会にうたわれる歌や、私がその後も現在まで研究しつづけている、歴史を語る「^{※12}太鼓ことば」などと一緒に、録音、編集して解説をつけたレコードアルバム（その後カセットブック）として公けにしたとき、それを聞いた何人も友人が「声がきれいだね」と讃嘆をこめていつてくれたのを思いだす。話したり歌ったりすることのプロでも何でもない、昼間は泥まみれになってかせいでいる、栄養不良も多いがきや娘やおばさんたちの、いったいどこからこんな素晴らしい声が、ことばが出てくるのか、私もむしろいぶかしさを抱いたくらいだ。

文字を用いた学校の言語教育で画一化され規格化されることのなかった、^{※13}アナーキーなことばの輝き——私はこの^{※14}サバンナに生きる人たちの音声言語の美しさを、よくこういうことばで表現する。この人たちは学校で、文法書を使って「言語」を教わらなかった。文法とも辞書とも無縁に生きてきたので、この人たちにはいわゆる方言だけでなく、村語があり、家語が、自分語がある。ひとりひとりが自分で身につけたことばを、自分の発音で、それも吹きさらしのサバンナの屋外生活の多い毎日のなかで、よく通る大きな声で話すことを、幼いときからくりかえして育ってきたのだ。声が、ことばが輝いているのは当然だともいえる。

さらに、私はこれもサバンナの人たちの言語生活とつきあって教えられたのだが、文字を使わない社会にあつて、しかも電気^{※15}の拡声装置を一切もたない生活で、上手に、よく通る声で話すということの価値がいかに大きいか。とくに文字偏重で、話すことの訓練がおろそかにされている私たち日本人の社会では、あまり話すことがうまい人はむしろ煙たがられたり、警戒されたりする。あの人は口べただが、文章を書かせると実にすっかりしているなどという人の方が、むしろ奥ゆかしいと思われたりする。だが、文字を用いない社会で、上手に話すということの価値は絶対だ。そういう価値観が支配する社会で、夜のまどい大きい声で上手にお話をして皆をおもしろがらせることを、子どものときからやって育つたとすれば、しかも学校の授業で、文字を使って「国語」としての^{※16}標準語を教えこまされなかつたとすれば、この人たちのことばが、アナーキーな輝きにみちているのはむしろ当然だともいえるのだ。たしかに、村語や家語や自分語が、^{※17}お上の定めた標準語で規格化されれば、ことばの通用する範囲はひろまるだろう。だがそれではことばが「通用する」とはどういうことなのか。そこで通用するのは、通用するように作られ、教えられた意味ではないのか。行政上の通達を「正しく」つまりお上が期待するように理解し、かなりの広範囲の地域の人々が、規格化された意味を伝えあう——標準語を作り、それを教える初等教育を徹底することが、近代のいわゆる^{※18}国民国家の形成と手をつないで進行したのは偶然ではない。

だがことばの「意味が伝わる」ということ、実際には何層にもなっているという、考えてみればあたりまえの事実が「耳をひらかれた」のも、自分語で何のためらいもなくいきいきと自己表現をし、「意味の理解」ということが何層にもなった、言語内言語とでもいうべき太鼓ことばをもっているこのサバンナの人たちとのつきあいのなかでのことだ。学校で教わる標準語で方言や自分語が画一化されることで消えてしまう意味の伝達の側面が、人間の生きた声による伝えあいのなかには重要なものとしてある。それは文字を用いた学校での標準語教育がすすみ、テレビの普及とともにNHKのアナウンサーのような話し方がひろまっていく日本社会でも、考えてみれば当然のことだし、^{※19}おくにことばや自分語による表現の大切さの認識が消えてしまったわけではない。私が音声言語の音象徴性の問題、ことばが声として、聞く人の感覚に、じかに働きかけて意味を伝える、^{※20}擬声語、^{※21}擬態語（私はそれらを統合する上位概念を表わす、ヨーロッパ語のideophone等に対応する語として「表象語」という語を提唱し、擬声語、擬音語を「表音語」、擬態語、擬容語、擬情語などを「表容語」と呼んでいるのだが）の、日本語やアフリカの言語での重要性、そこからとくに^{※22}表容語が貧困なヨーロッパ諸語のことに興味をもつようになったのも、サバンナの人たちのおかげだ。

私ははじめ、この人たちの歴史意識を研究して、『無文字社会の歴史』（岩波同時代ライブラリー、一九九〇）などという本も書いた。だが、この人たちとのつきあいが長く、深くなるにつれ、私は「無」文字社会という欠落を意味する表現は、文字があることを社会の「進歩」によって達成されるべき段階のように考え、それを前提としてあるべきものがないとでもいうようなとらえ方に、やはりまだどこかで汚染されているように思い、「文字を必要としなかった社会」というとらえ方もあると思うようになった。

実際、この人たちの、声を含む音のコミュニケーションや身体表現の世界的豊かさ、私が主につきあつた^{※23}モシ社会にはとほしいが、他の多くのアフリカ社会では発達している木彫など画像表現の豊かさに接していると、この人たちは「文字が欠如している」状態にある（だから早く学校をたくさん作り文字教育を普及した方がいい）と考えるより、「文字を必要としなかった」それなりに自足した豊かな表現と伝えあひの世界に生きていると考えたくなる。だからといって、私は文字と文字教育の意味を頭から否定しているのではなく、それについてはまた別の長い議論が必要になるのでいまは省くが、ただやみくもに識字率を上げることが社会の進歩だと考えるのではなく、文字を用いた言語教育によって失われるもの大きさについて、私たちが忘れたことさえ忘れてしまっていることを思い出し、問題化することの大切さを指摘したいのだ。

（三浦信孝『多言語主義とは何か』・川田順造「ことばの多重化Ⅱ活性化―アフリカの体験から」より）

- ※1 ブルキナファソ：西アフリカに位置する国家。旧フランス領。一九八四年にオートボルタから国名変更した。
- ※2 文化人類学：人類の社会、文化の側面を研究する学問。生活様式、言語、習慣などを比較研究する。
- ※3 言語地図：言語または方言の分布を、色や線によって地図上に表したもの。
- ※4 あげ足とり：人の言い間違いや言葉尻を捉えて非難したり、からかったりすること。
- ※5 通念：一般に共通した考え。
- ※6 宗主国：従属国に対して政治、外交などを管理、支配する権限を持つ国。支配国。
- ※7 公用語：公の場での使用が定められている言葉。植民地では宗主国の言語が公用語とされることが多い。
- ※8 識字率：十五歳以上人口に対する、読み書きができる人口の割合。
- ※9 農閑期：農作業の暇な時期。
- ※10 まどい：親しく集まること。団らん。
- ※11 ソアスガ：西アフリカのモシ族の女性や年少者が集まって、互いにお話をしたり言葉遊びをしたりする場。
- ※12 太鼓ことば：太鼓の音を言葉のようにして用いていること。人間の声ではなく、太鼓の音の高低やリズムによって意味を伝える。
- ※13 アナーキー：anarchy（英語）。無政府、または無秩序な状態であること。
- ※14 サバンナ：savanna（英語）。熱帯、亜熱帯地方に見られる草原。長い乾季があり、雨季には草が生い茂る。
- ※15 拡声装置：マイク、スピーカーなどのこと。
- ※16 標準語：一国の言語の規範とされる言語。
- ※17 お上：政府、行政、支配者など。
- ※18 国民国家：近代において、国民の単位にまとめられ成立した国家。
- ※19 おくにことば：方言。
- ※20 擬声語：物の音や動物の鳴き声の感じを表した語。擬音語。「がたがた」「にやあにやあ」など。
- ※21 擬態語：事物の状態や身ぶりの感じを表した語。「にっこり」「すべすべ」など。
- ※22 表容語：筆者が、擬態語のように主に視覚的な印象を表す際に用いる語。

※23 モシ社会：ブルキナファソを中心とした、西アフリカのサバンナ地帯に居住するモシ民族の人々の社会。

〔問 11〕傍線部Ⅰ「知識としてある現実と、現実の現実」とはどのようなことか。その説明として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 言語地図で分布を示されている言語の使用の在りようと、実際に現地で使用されている言語の在りようのこと。
- 2 先人の行った業績にあげ足りせざるを得ないということと、現地で暮さないと得られない感覚があること。
- 3 現地理解のために必要な言語地図の在り方と、実際には宗主国がのこした公用語だけが現地で使用されていること。
- 4 言語が研究対象として扱われていることと、言語が実際に生きている誰かを喜ばせるために存在していること。
- 5 言語地図が学生時代の教材として有用だということと、実際には人々の移動により現地の公用語が変化していること。

〔問 12〕傍線部Ⅱ「この人たちのことばが、アナーキーな輝きにみちているのはむしろ当然だともいえるのだ」とあるが、なぜか。その説明として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 学校で標準語を習わず、響きのよいことばが記された書物を声に出して読んでいるから。
- 2 学校で文法を教わり、自分にとって心地の良いことばを身振り手振りで伝えているから。
- 3 学校で教師から公用語を習い、さらに長老たちのスケールの大きい話を聞いているから。
- 4 学校でことばを習わず、よく通る声で皆を楽しませる話し方を自然に身につけているから。
- 5 学校で教科書を中心に、文法書や辞書を使った文字偏重の教育を受けることができたから。

〔問 13〕傍線部Ⅲ「ことばが『通用する』とはどういうことなのか」とあるが、ここでの「ことば」とはどのような言葉か。その説明として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 多くの人々が意思疎通を図るために自然に発達してきた言葉。
- 2 行政上の通達が広く通用するように作られた規格化された言葉。
- 3 お上の通達が正しく伝わるために作られた方言を基本とした言葉。
- 4 皆をおもしろがらせるためにひとりひとりが自分で身につけた言葉。
- 5 電気の拡声装置を一切用いなくても伝わる規格化された言葉。

〔問 14〕傍線部Ⅳ「私たちが忘れたこと」とは、どのようなことか。その説明として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 人々の伝えあいは標準語ではなく、自分語といった規格化されていない言葉だけで成り立つという事実。
- 2 学校教育が標準語を育んできたように言われているが、実際にはテレビの普及が標準語を育てている実情。
- 3 コミュニケーションが多様な言葉で行われる事実と、音や身体表現によって行われる豊かな伝えあいの世界。
- 4 本来あるべきはずの文字が「欠落」し「欠如」しているのは、遅れた段階の社会であるという常識。
- 5 文字があることを前提とし、文字を獲得することこそが達成されるべき進歩の段階であるとするような考え方。

〔問 15〕本文の趣旨に合う説明として適切ではないものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 アフリカは、言語というものを根源から考えることのできる貴重な場を提供してくれる。
- 2 サバンナの人たちのアナキーなことは、文字を用いた学校の言語教育で画一化されなかったものだ。
- 3 サバンナの人たちのアナキーなことは、上手に話すということの価値が絶対である環境で育まれたため、音声言語としての美しさを持っていた。
- 4 サバンナの社会は、「無」文字社会ではなく文字を必要としなかった社会であり、自足した豊かな表現と伝えあいの世界である。
- 5 文字を用いた言語教育によって社会が完全に画一化される前に、文字偏重の教育を改善することが必要だ。

